

第 54 回名古屋春栄会  
演目のあらまし

平成 29 年 7 月 30 日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

八島 (やしま)	1
邯鄲 (かんとん)	2
岩船 (いわふね)	3
箬 (えびら)	4
西行桜 (さいぎょうざくら)	5
実盛 (さねもり)	6
竜田 (たつた)	7
養老 (ようろう)	8
笹ノ段 (ささのだん) [百万 (ひゃくまん)]	9
難波 (なにわ)	10
鞍馬天狗 (くらまてんぐ)	11
嵐山 (あらしやま)	12
羽衣 (はごろも)	13
猩々 (しょうじょう)	14
〔能のミ二知識〕	15

このリーフレットは、第54回名古屋春栄会の演目を解説したものです。  
演目の記載順は、番組の順です。  
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 八島（やしま）

---

【分 類】二番目物（修羅物＝勝修羅） ＊カケリ

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老漁夫（面・尉面）、後シテ：源義経の霊（面・平太）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

都の僧が、西国行脚の途中、讃岐国（香川県）屋島の浦にやって来ます。日も暮れて来たので、浜辺の塩屋で一夜を明かそうと思います。そこへ、年老いた漁夫と若い漁夫が、釣を終えて帰って来ます。僧が漁夫に宿を求めると、一度は粗末なのでと断りますが、都の者と聞いて懐かしがり、中へ招き入れます。そして老漁夫は、僧の求めに応じて、義経の大將ぶり、景清と三保谷の鋸引、佐藤継信と菊王の壮烈な最期など屋島での源平合戦の様子を物語ります。その内容があまりに詳しいので、僧が不審に思って名を尋ねると老漁夫は、夜の明け方、修羅の時に名乗ろうといい、義経の幽霊であることをほのめかして消えてしまいます。

<中入>

そこへ土地の者がやって来て、そこにいる僧を咎めます。僧はその者が本当の塩屋の主だと知って、屋島合戦の物語を所望します。語り終えた塩屋の主は、僧の話から先ほどの老漁夫は義経の霊であろうと伝えます。その夜、僧の夢の中に、甲冑姿も凛々しい義経の幽霊が現れ、まだこの地に執心が残っているのだと訴えます。そして、屋島の合戦で、波に流された弓を敵に取られまいと、身を捨てて拾い上げた「弓流し」の有様を再現し、修羅道での絶え間のない闘いぶりを見せますが、夜明けと共にその姿は消え、後には風の音が聞こえるだけです。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

今日の修羅の敵はたそ。なに能登の守教経とや。あらものものし手なみは知りぬ。思いぞ出ずる壇の浦の。その舟軍いまははや。その舟軍いまははや。閻浮に帰る生き死にの。海山一同に震動して。舟よりは関の声。陸には波の楯。月にしらむは。剣の光。潮に映るは。兜の星のかけ。水や空空行くもまた雲の波の。打ち合い差しちごうる。舟軍のかけひき。浮き沈むとせしほどに。春の夜の波より明けて。敵と見えしは群居るかもめ。関の声と聞こえしは。浦風なりけり高松の。浦風なりけり高松の。朝嵐とぞなりにける。

## 邯鄲（かたん）

【分類】四・五番目物（遊楽物・唐物） ＊楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：盧生（面：邯鄲男）

【あらすじ】（今回の舞囃子の部分…下線部）

中国、蜀の国の盧生という青年が、人生に迷いを感じ、楚の国羊飛山に住む賢者に人生とは何か、問うてみようかと旅に出ます。途中、邯鄲の里へ着き、一見の宿屋に泊まります。その宿の女主人は、かつて仙人の法を使う人を泊めたときにそのお礼にと不思議な枕をもらいました。その枕を使って寝ると、夢によって悟りを開くというのです。女主人は盧生の素性や旅の目的などを聞くと、食事の用意が出来る間、しばしその枕を試してみるように勧めます。そこで盧生も、その枕を借りて一眠りすることにします。うとうとすると起こす人がいます。楚の国の帝が位を盧生に譲るといふ勅使です。盧生は勅使に促されて、天にも昇る心地で輿に乗って宮殿に赴き、王位につきます。それから50年栄華を極め、在位を祝う酒宴の席で盧生も歓喜の舞を舞います。と、その時、宿の女主人が粟の飯が炊けたと起こしに来ます。目を覚ました盧生は、全ては夢であったのかと、しばらくは呆然としますが、人生何事も一炊の夢と悟り、不思議な枕に感謝しながら、自分の故郷である蜀の国へと帰っていくのでした。

【詞章】（今回の舞囃子の部分の抜粋）

わが宿の。わが宿の。菊の白露今日ごとに。幾世つもりて淵となるらん。よも尽きじよも尽きじ。薬の水も泉なれば。汲めども汲めども。いやましに出ずる菊水を。飲めば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛び立つばかり有明の。夜昼となき楽しみの。栄花にも栄耀にも。げにこの上や。あるべき。

<楽>

いつまでぞ。いつまでぞ。栄花の声も。栄花の声も。常磐にて。なおいく久し有明の月。月人男の。舞なれば。雲の羽袖を。重ねつつ。喜びの歌を。謡う夜もすがら。謡う夜もすがら。日はまた出でて。明きらけくなりて。夜かと思えば。昼になり。昼かと思えば。月またさやけし。春の花咲けば。紅葉も色濃く。夏かと思えば。雪も降りつつ。四季おりふしは目の前にて。春夏秋冬万木千草も。一時に花咲けり。面白や。不思議やな。かくて時過ぎ頃去れば。五十年の栄華も尽きて。誠は夢の内なれば。女御更衣。百官卿相千戸万户。従類眷属宮殿楼閣。皆消え消えと失せ果てて。ありつる邯鄲の枕の上に。眠りの夢は。覚めにけり。

## 岩船（いわふね）

---

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物）

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：童子（面・童子）、後シテ：龍神（面・黒髭（泥小飛出））

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の帝が摂津国（大阪府）住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思って問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た<sup>と</sup>告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っていた<sup>だけ</sup>ればありがたい<sup>と</sup>言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだ<sup>と</sup>言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

宝をよする波の鼓。拍子を揃えてえいやえいや。えいさらえいさ。引けや岩船。天の探女か。波の腰鼓。ていとうの拍子を。打つなりやさざら波。えめぐりめぐりて住吉の松の風。吹き寄せやえいさ。えいさらえいさと。押すや唐簾の。押すや唐簾の潮も満ち来る。波にのって。八大龍王は。海上に飛行し。御船の綱手を手に繰りからまき。潮に引かれ。波にのって。長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出だすや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君を守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。

## 籬（えびら）

---

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：里人（直面）、後シテ：梶原源太の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州から都見物を志す一人の旅の僧が、早春の頃、須磨の浦の生田川のほとりに着きます。ちょうどそこに、色あざやかに咲いている梅の木があるので、来合わせた男に問うと、籬の梅だと答えるので、どうしてそういう名がついたのかと尋ねます。その男は源平の合戦の時、源氏方の若武者梶原源太景季が折から咲き誇っていた梅の花を手折って、笠印の代わりに籬にさし、めざましい活躍をしたので、籬の梅の名が残ったとその由来を語ります。さらに一ノ谷の合戦の様子を詳しく物語るの、僧が不審がると、男は自分は景季の亡霊だと名乗って、たそがれ時の梅の木陰に消え失せます。

<中入>

土地の者から重ねて籬の梅の話聞いた僧は、奇特の思いに立ち去りかね、木陰で仮寝をしていると、夢に武者姿の影季が現れ、修羅道での苦患を見せ、また往昔の合戦でのめざましい戦ぶりを見せたかと思うと、夜明けと共に回向を頼んで消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

山も震動。海も鳴り。雷火も乱れ。悪風の。紅焰の旗をなびかし。紅焰の旗をなびかして。閻浮に帰る生田河の。波を立て水をかえし。山里海川も。みな修羅道の巷となりぬ。こはいかにあさましや。しばらく心を静めて見れば。所は生田なりけり。時も昔の春の。梅の花盛りなり。ひと枝手折りて籬にさせば。もとよりみやびたる若武者に。あいおう若木の花かずら。かくれば籬の花も源太も。我先駆けん先駆けんとの。心の花も梅も。散りかかって面白や。敵のつわものこれを見て。あっぱれ敵よ逃すなとて。八騎が中にとりこめらるれば。兜も打ち落とされて。大童の姿となつて。郎等三騎に後ろをあわせ。向う者をば。拌み打ち。まためぐりあえば。車斬り。蜘蛛手かく繩十文字。鶴翼飛行の秘術を尽くすと見えつるうちに夢覚めて。しらしらと夜も明くれば。これまでなりや旅人よ。暇申して花は根に。鳥は古巣に帰る夢の。鳥は古巣に帰るなり。よくよく吊いてたびたまえ。

## 西行桜（さいぎょうざくら）

---

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 シテ：老桜の精（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

京都西山にある西行の庵室には、老木の桜が今は盛りと咲いています。西行は、一人心静かに花を楽しもうと、今年は花見禁制にする由を能力に伝え、その事を触れさせます。そこへ、ここかしこと花の名所を訪ねて、春の日を送っている下京辺の人々が、西行の庵の桜が盛りと聞いて、やって来ます。西行は煩わしくは思いますが、花を愛する気持ちを汲んで断りかね、柴垣の戸を開けて一行を請じ入れます。しかし浮世を離れて花を眺めたいと思っている西行にとっては、俗の花見客が大勢やって来るのは、やはり迷惑です。そして思わず、「花見んと 群れつつ人の 来るのみぞ あたら桜の 咎にはありける」を口ずさみますが、花見の人達と共に花を愛で仮寝をします。

その夜、西行の夢の中に、老木から白髪のお翁が現れて、西行の先刻の歌の心を問いただし、桜は非情無心の草木であるから、浮世の咎はないのだと言います。そして自分は桜の精だと名乗り、歌仙西行に逢えたことを喜び、名所の桜を讃えて舞をまい、春の夜を楽しみますが、やがて夜が明けると、老桜の精は別れを告げて消え失せ、西行の夢も覚めます。あたりは一面に敷き詰めたように落花が散り、人影もありません。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

見渡せば。柳桜をこきまぜて。都は春の錦。さんらんたり。千本の桜を植え置きその色。所の名に見する。千本の花ざかり。雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花ざかり。四王天の栄花も。これにはいかで勝るべき。上なる黒谷下川原。むかし遍昭僧正の。浮世をいとし華頂山。鶯のみ山の花の色。枯れにし鶴の林まで。思い知られてあわれなり。清水寺の地主の花。松吹く風の音羽山。ここはまた嵐山。戸無瀬に落つる。滝つ波までも。花は大井川。井堰に雪や。かかるらん。

## 実盛（さねもり）

---

【分類】 二番目物（修羅物）

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：老翁（面・三光尉）、後シテ：齊藤別当実盛（面・三光尉）

【あらすじ】（今回の独吟〔クセ〕の部分…下線部）

諸国遊行の他阿弥上人が加賀国（石川県）篠原で連日説法を行っている、一人の老人が一日も欠かさず聴聞に来ます。しかし、不思議なことにその老人の姿は、上人以外の人には見えません。そのため、上人がその老人と言葉を交わしていても、上人が独り言をしゃべっているように聞こえ、土地の人は不審に思います。今日も、その老人がやってきたので、上人がその名を尋ねますが、なかなか明かしません。強いて尋ねると、人を遠ざけた後に、齊藤実盛は篠原合戦で討たれ、その首をこの前の池で洗ったことを話し、自分こそ二百余年を経て、なお成仏できないでいる実盛の亡霊であると明かして消え失せます。

<中入>

上人は里の男に実盛の出自、最期の様子、首実検の様などを尋ね、いよいよ先刻の老人は実盛の亡霊であると認め、その跡を吊うことにします。その夜、上人が池のほとりで念仏を唱えていると、実盛の霊が、白髪の老武者の姿で現われ、その手向けに感謝し、報恩のため、首実検の様、さかのぼって錦の直垂を拝領しての出陣の模様、木曾義仲と組もうとして、手塚太郎に打ち取られた一部始終を物語り、なおも回向を頼んで消え失せます。

【詞章】（今回の独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

また実盛が。錦の直垂を着ること。私ならぬ望みなり。実盛。都を出でし時。宗盛公に申すよう。古郷へは錦を着て。帰るといえる本文あり。実盛生国は。越前の者にて候いしが。近年。ご領につけられて。武蔵の長井に。居住つかまつり候いき。この度北国に。まかり下りて候わば。定めて。討死つかまつるべし。老後の思い出これに過ぎじ。ご免あれと望みしかば。赤地の錦の。直垂をくだしたまわりぬ。しかれば古歌にももみじ葉を。分けつつ行けば錦着て。家に帰ると。人や見るらんと詠みしも。この本文の心なり。さればいにしえの。朱買臣は。錦の袂を。会稽山にひるがえし。今の実盛は名を北国の巷にあげ。隠れなかりし弓取りの。名は末代に有明の。月の夜すがら。懺悔物語。申さん。



## 竜田（たつた）

---

【分類】 四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作者】 金春禅竹

【主人公】 前シテ：巫女（面・増女）、後シテ：竜田姫の神霊（面・増女）

【あらすじ】（今回の舞囃子の部分…下線部）

日本六十余州の神社仏閣に納経を志す廻国の僧が、奈良の社寺を拝し終え、続いて河内国（大阪府）へと急いでいます。途中、竜田明神に参詣のため、竜田川を渡ろうとすると、一人の巫女が現れ、「竜田川 紅葉乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなん」という古歌をひいて止めます。僧が、それは秋のことで、今はもう薄氷が張っている頃なのにと言うと、巫女は更に「竜田川 紅葉を閉づる 薄氷 渡らばそれも 中や絶えなん」という歌もあると答え、別の道から社前に案内します。そして、霜枯れの季節にまだ紅葉しているのを不審に思う僧に、紅葉が神木であることを語ります。さらに竜田山の宮廻りをするうちに、巫女は、自分は竜田姫の神霊であると名乗って社殿の中へ姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、僧が社前で通夜をしていると、竜田姫の神霊が現れて、明神の縁起を語り、あたりの風景を賞美したあと、神楽を奏して、虚空へと上っていきます。

【詞章】（今回の舞囃子の部分の抜粋）

さるほどに夜神楽の。さるほどに夜神楽の。時うつり頃去りて。宜祢が鼓も数至りて。月も霜も白和幣。ふり上げて。声澄むや。謹じょう。再はい。

<神楽>

ひさかたの。月も落ちくる。滝まつり。波の。竜田の。神のみ前に。神のみ前に。散るはもみじ葉。すなわち神の幣。竜田の山陰の。時雨降る音は。さっさっの鈴の声。立つや川波は。それぞ白木綿。神風松風吹き乱れ吹き乱れ。もみじ葉散り飛ぶ木綿附鳥の。み被も幣も。ひるがえる小忌衣。謹上再拜再拜再拜と。山河草木国土治まりて。神はあがらせ。たまいけり。

## 養老（ようろう）

---

【分 類】初番目物（脇能） ＊神舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：山神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

初夏に美濃国（岐阜県）本巢郡に霊水が湧き出るといふ報告があったので、雄略天皇の勅命を受けて勅使が下向します。一行が養老の滝のほとりに着くと、老人と若者の二人のきこりがやって来ます。勅使はこれこそ話に聞く養老の親子であろうと思って尋ねると、果たしてそうでした。老人は問われるままに養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。次いで老人は勅使を滝壺に案内し、霊泉をほめ、他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使が感涙を流し、この由を奏聞しようと都に帰ろうとすると、天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。

<中入>

そこへ土地の者が来て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで若返りの様を見せます。続いて養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、共に衆生を救おうとの御誓願であって、時として神として現れ、仏として現れるのであると述べます。そして、峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を舞い、太平の世を祝して神の国に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

松陰に。千代をうけたる。みどりかな。さもいさぎよき山の井の水。山の井の水。山の井の。水とうとうどして。波悠々たり。治まる御代の。君は船。君は船。臣は水。水よく船を。浮め浮めて。臣よく君をあおぐ御代ぞといく久しきも。尽きせじや尽きせじ。君に引かるる玉水の。上澄む時は。下も濁らぬ滝津の水の。浮き立つ波の。返すがえすも。よき御代なれや。よき御代なれや。万歳の道に帰りなん。万歳の道に帰りなん。

## 笹ノ段（ささのだん）〔百万（ひゃくまん）〕

【分 類】四番目物（狂女物） \*イロエ

【作 者】世阿弥

【主人公】シテ：百万（面・曲見）

【あらすじ】（笹ノ段の部分…下線部）

大和国（奈良県）吉野の男が、西大寺のあたりで、一人の幼い子どもを拾い、その子を連れて、京都嵯峨の釈迦堂の大念仏にやって来ます。そして門前の男に、何か面白い見ものはないかと尋ねると、百万という女物狂が面白く音頭をとるというので、それを呼び出してもらいます。やがて、門前の男の念仏に誘われて、百万が出て来て、念仏の音頭をとって踊り、仏前に進んで、我が子に逢わせてほしいと祈ります。

すると先の子どもが、あれこそ自分の母親だというので、男は、それとなく百万に事情を問いただします。百万は、夫に死に別れ、子どもは生き別れたため、この様に思いが乱れたのだと語ります。男が、信心によって子どもが見つかるだろうと言うと、百万はその慰めの言葉に力づけられて、奉納の舞を舞い始めます。

百万は、我が子に逢おうと、奈良からはるばる旅して、この春嵯峨へやって来たことを述べ、このように大念仏に集まっている中に、我が子はいないのだろうか、身の上を嘆き、狂乱の状態で仏に手を合わせます。

男は、いよいよ間違いなく子どもの母親であると思い、子どもを引き合わせます。百万は、もっと早く名乗ってほしかったと恨みはしますが、仏の徳をたたえ再会を喜びます。

【詞章】（笹ノ段の部分の抜粋）

げにや世世ごとの親子の道に。まとわれて。親子の道にまとわれて。なおこの闇を  
晴れやらぬ。朧月のうす曇り。わずかに住める世になお。三界の首枷かや。牛の車  
の常とわに。いづくをさして引かるらん。えいさらえいさ。引けや引けやこの車。  
物見なり物見なり。げに百万が姿は。もとより長き黒髪を。荆棘のごとく乱して。  
古りたる烏帽子。引きかずき。また眉根黒き乱れ墨の。うつし心かむら烏。憂かれ  
ど人は。訪いもこで。思わぬ人を尋ぬれば。親子の契り麻衣。肩を結んで裾にさげ。  
裾を結びて肩にかくる。筵ぎれ。管ごもの。乱れ心ながら。南無釈迦阿弥陀仏と。  
信心をいたすも。わが子に会わん。ためなり。

## 難波（なにわ）

---

【分類】初番目物（協能） ＊楽

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：王仁（面・悪尉）

【あらすじ】（今回の連吟〔クセ〕の部分…下線部）

廷臣が従者と共に熊野から京の都に帰る途中、難波に立ち寄ります。すると杉箒を持った老翁が連れの男と共に現れ、天下泰平の春を詠いながら、梅の木陰を掃き清めます。廷臣が老人たちに梅の木のいわれを尋ねると、老翁は難波津の歌、仁徳帝の慈愛、難波の都の平和と繁栄について語り、自分は仁徳帝の即位を推進した百済国の王仁であると名乗り、舞楽を舞うことを約して立ち去ります。

<中入>

難波の春の夜に木華開耶姫と王仁が現れて名乗ります。そして木華開耶姫が梅の花を詠じて舞を舞います。続いて王仁が難波を祝福して舞楽を舞います。舞楽のうちの古の聖賢をたたえ、治世を祝福します。

【詞章】（今回の連吟〔クセ〕の部分の抜粋）

高き屋にのぼりて見れば煙りたつ。民のかまどは。賑いにけりと。叡慮にかけまくも。かたじけなくぞ聞えける。然ればこの君の。代々にためしを引くことも。げに有難き詔。国々にあまねく。三年の御調ゆるされし。その年月もきわまれば。浜の真砂の数つもりて。雪は豊年の御調物。ゆるす故にはなかなか。いやましに運ぶ御宝の。千秋万才の。千箱の玉をたてまつる。しかればあまねき御心の。いつくしみ深うして。八島の外まで波もなく。広き御恵み。筑波山のかげよりも繁き御影は大君の。国なれば土も木も。さかえ栄うる津の国の。難波の梅の名にしおう。匂いも四方にあまねく。一花ひらくれば天下みな。春なれや万代の。なお安全ぞ。めでたき。

## 鞍馬天狗（くらまてんぐ）

---

【分類】五番目物（天狗物） ＊舞働

【作者】宮増

【主人公】前シテ：山伏（直面）、後シテ：大天狗（面・大癒見）

【あらすじ】（今回の舞囃子の部分…下線部）

鞍馬山の奥、僧正が谷に住む山伏が、鞍馬寺の人々の花見があると聞いてやって来ます。一方、西谷の能力が、東谷の僧のもとに花見への招きの文を届けます。

東谷の一行は、その能力と共に西谷に来て、盛りの花を眺め、西谷の能力も稚児たちの慰みにと小舞を舞います。そこへ山伏が忽然と姿を現します。なんとなく興をそがれた一行は、そのまま帰ってしまいます。一人の稚児が残って、山伏に声をかけ一緒に花を見ようといひます。山伏はこの少年が源氏の頭領の三男の沙那王（牛若丸）であることを知り、その境遇に同情し、花の名所を案内してまわります。牛若が好意に感謝してその名を尋ねると、山伏はこの山に住む大天狗であると名乗り、兵法を伝えるから平家を滅ぼすように勧め、明日の再会を約して飛び去ります。

<中入>

翌日、牛若が頭紋紗のはなやかな直垂姿で僧正が谷に来ると、大天狗が全国の名だたる天狗を引き連れて現れます。そして張良の故事を語り、兵法の秘伝を授け、夕刻になり、行く末の武運を守る事を約して消えうせませす。

【詞章】（今回の舞囃子の部分の抜粋）

そのごとくに和上臈も。そのごとくに和上臈も。さもはなやかなるおん有様にて。姿も心も荒天狗を。師匠や坊主とご賞翫は。いかにも大事を残さず伝えて。平家を討たんとおぼし召すかや優しの心ざしやな。そもそも武略の誉の道。

<舞働>

そもそも武略の誉の道。源平藤橘四家にもとりわき。かの家の水上は。清和天皇の後胤として。あらあら時節を考え来たるに。驕れる平家を西海に追っくだし。煙波蒼波の浮雲に飛行の自在をうけて。敵をたいらげ会稽をすすがん。おん身と守るべし。これまでなりや。おん暇申して立ち帰れば。牛若袂にすがりたまえばまた立ち帰り。げに名残あり。西海四海の合戦というとも。影身を離れず。弓矢の力を添え守るべし。頼めや頼めと夕陰暗き。頼めや頼めと夕陰鞍馬の。梢にかけて。失せにけり。

## 嵐山（あらしやま）

---

【分 類】 初番目物（脇能＝荒神物） ＊中ノ舞

【作 者】 金春禅鳳

【主人公】 前シテ：花守の老人（面・小尉）、後シテ：蔵王権現（面・大飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

嵯峨帝に仕える臣下が、勅命を受けて、嵐山へ桜の咲き具合を見に行きます。というのは大和吉野山が桜の名所であることは有名ですが、あまりに都から遠いので、花見の御幸も簡単にはできません。それで吉野の千本の桜を、都近くの嵐山に移し植えられましたが、吉野の花が今は盛りだというので、嵐山の花もよく咲いているのではないかと、というお尋ねがあったからです。勅使一行が嵐山につくと、老人夫婦が現れ、木陰を清め、花に向かって祈念します。勅使がその謂れを聞くと、老人夫婦は、この千本の桜は、吉野から移されたものだから、木守、勝手の二神が時折現れて守護する神木であり、嵐という名だが、花を散らさないのだと語ります。やがて自分達こそ木守、勝手の神なのだと言乗り、再会を約して、雲に乗って吉野の方に飛び去ります。

<中入>

そのあと、蔵王権現の末社の神が現れ、勅使一行に対して舞を舞ってもてなしていると、木守、勝手の二神が今度は神の姿で現れ、嵐山の美景を眺めつつ舞樂を奏します。続いて蔵王権現も現れて、衆生の苦患を助け、国土を守ると誓い、栄ゆる御代を祝福します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

和光利物の御姿。和光利物の御姿。我本覚の都を出でて。分段どうごの塵に交わり。金胎兩部の一足をひっさげ。悪業の衆生の苦患を助け。さて又虚空に御手を上げては。たちまち苦海の煩惱を払い。悪魔降伏の青蓮のまなじりに。光明を放つて。国土を照らし。衆生を守る。誓を現わし。子守勝手。蔵王権現一体分身同体異名の姿を見せて。おのおの嵐の山によじ登り。花にたわむれ梢にかけって。さながらここも黄金の峰の。光も輝く千本の桜。光も輝く千本の桜の。栄ゆく春こそ。久しけれ。

## 羽衣（はごろも）

---

【分 類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） \*序ノ舞

【作 者】 不詳

【主人公】 シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

駿河国（静岡県）三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやってきました。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充満の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

## 猩々（しょうじょう）

---

【分 類】五番目物（祝言物） ＊中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。



## 能のミニ知識

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

### ★能の楽器

**囃子方[はやしかた]**…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

**笛(能管)**:竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

**小鼓**:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

**大鼓**:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

## ★略式の演能

### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

### 舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

### 袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

### 半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

### 独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

### 一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

### 一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

### 素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

### 番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

## ★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。  
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>